

育草器のことなど

幸 府 倂

昨年夏、科学技術庁の監修で我が国における超一流の科学者達の筆によって書かれた「21世紀への階段」副題として40年後の日本の科学技術という2部からなる書物が巷間に顔をみせている。

その内容は40年後即ち紀元2000年における科学技術の進歩がもたらした姿をあらゆる角度から書き出している。そうして、もはや我々が40年後の子孫のことを考えて、政治や科学技術の研究を計画的に進めなければ間に合わない位、時代の潮流は速く激しいのだと指摘し、このためには日本人はすべからずイメージャーでなければならない。従来あるジュリスト（法律家）、エコノミスト（経済人）、エンジニア（技術者）に対して、新しいタイプの間人像が打ち立てられなければならないのだ。それはイメージャーである。……まず夢をみることである。その夢を構想に打ち立てることである。その構想を現実に実現して行くテクニクの保持者であることである。このような新しいタイプの人を私はイメージャーと呼ぶ。……この一文はこのプロローグに中曾根康弘さんが寄せられたものの引用である。

さて更に引用させて頂くと第2部に「未来の食物」という項がある。

……それなら40年後の食事は、どんなにかわっているだろう。1日に2,500カロリーのエネルギーを得られる「トランジスター食料」はでてこないものだろうか。……だがご安心下さい。たとえ科学が発展しても、とても1日1粒2,500カロリーなどという食物は出現しないのである。……もちろん栄養素である蛋白質や、炭水化物、脂肪などが人造でどんどん製造できる時代、というものは将来やってくるだろうが、ばく大な量にのぼる国民食糧の供給ともなれば、やはり、その基本線となるものは農場生産物一家畜の飼育や作物栽培によって得られる天然の食品に依存することになるだろう。……戦後は動物性食品の占める比重が増大の一途をたどってきているが、もう10数年もすれば植物性食品と動物性食品の比例は逆転する……「重労働者の減少

から文化の高い食生活への転換」となり、このためには乳牛2,000万頭の飼育を必要とするとして同書は更にこの飼料には土地を使わない室内での人工育草法が脚光を浴びてくる。これはエア・コンディショニングの完全な室内で、人工照明を行なって青草の水耕栽培をするのである。……こうした能率的な育草器をならべた大育草工場が近代的な農家につながり、数多くの乳牛が遊び、そのミルクはハイウェイを農家の自家用トラックで運ばれる。—これが21世紀の日本の農村である。と記している。

私は余りに長々と同書を引用しすぎイメージャー魅力にとりつかれたようである。

だが皆さん此の人工育草器はすでに我が国においても某社によって実現化し目下試験段階から一部では応用段階に入っているのです。

約3坪の此の育草器は年間14,000貫1日当たり約40貫の緑草を生産するといっている。

ところで、いましてかに此の育草器の出現の波紋を追ってみようではないか。

まず1番に頭に描かれることは土地なき畜産の出現であろう。すでに養鶏業更には養豚業まで土地なき畜産という名にふさわしい飼養形態がとられ、従って大規模なスケールで企業化されている。

土地から牛乳をしぼるという理念のもとにおける酪農も新しい科学技術の前には一歩退かざるを得ないであろう。今日の住宅政策がもたらした団地住宅に類似して大ビルディングに乳牛が繋がれ団地牛舎が各所にみられるという乳牛の集団飼養の可能性は疑う余地もないようである。大企業の乳牛部門への進出は中小家畜に引続いて実現されそうである。

育草器の出現は酪農民にも平等な恵を与えてくれるであろう。飼養規模の拡大或は育草器が生産した青草の持つ未知因子による繁殖率の向上、泌乳量の増加も又期待されるものであろう。

それにしても増して零細農家の協業化による酪農経営の確立に持つ価値は忘れ得ざるものではあるまいか。

岡山畜産便り 1961.04

県南部百万都市の出現、臨海工業基地の発展に伴ない兼業農家の増加は歴然としている。そこには老人と女の手による農業が待ちかまえているだろう。他面牛乳の消費は著しく増大してゆく。極めて簡単な操作によって栽培される育草器の登場を願わねばなるまい。

所得の増大に伴ない澱粉質食糧が減少してゆく傾向は世界的なものであり F A O の飼料をまつまでもない。我々が如何に穀物から縁遠くなるといっても米は年間 1,300 万トン程度は必要とされている。

さればこの米と共に存在する稲藁の飼料的利用は、とりわけ水田酪農において重要である。

栄養的にみてマイナスの存在である此の副産物は、昨今の栄養学からすれば乳牛の胃の消化機構の上から重要視されているとか聞いている。けれども栄養価値に乏しいことにはかわりがない。そこで育草器によってパーフェクトな栄養産物を作り出し稲藁を素材にした配合基礎資料もこの育草器の力を借りて出来るかも知れない。

こうなれば稲藁の功罪は又かわってくるだろう。

昭和 36 年度の岡山県の牧草、飼料作物対策の予算は非常な膨張ぶりとか聞いている。大変に結構なことである。

草資源の開発利用は山野は勿論耕地にまで拡大されようとしている。大変よろこばしいことである。

けれども果しれない科学技術の進歩がもたらした育草器によって畜産立地が大きくゆりうごかされるであろうことは想像に難くない。画一的な草地開発は許されないであろうこともまた想像に難くない。

そうしてまた、此の一例をまつまでもなくイメージニヤー達が輩出しうるムードがとりわけ試験機関に育てられなければならないと痛感するのは私自身のヘソマガリな根性の故であろうか。

(3月16日記)